

「満州」幻想——「楽土」はかくして生成される

劉 建 輝

北京大学

はじめに

関東、つまり山海関より東は、もともと清の祖宗発祥の地として、開国以来長い間、関内からの移住が禁止されていた。それが十九世紀に入り、ロシア勢力の南下に伴う軍事上の必要からようやく二百年も続いた「封禁令」が解かれ、いわゆる「闖関東」という関内各地からの人口移入が一つのブームを見せ始めたのである。こうした歴史的推移から分かるように、そもそも中国国内でもいわば「辺疆」でしかなかったこの地域は、遠い渤海国の一時期を除いて、もちろん彼岸の日本とはけって縁が深い場所とは言えなかった。ところが、この歴史的にも文化的にも日本と随分隔たった関東——日本で言う「満州」は、二十世紀に入るやいなや、どういわけか突如として膨張日本の北の最前線と変わり、続いてその死活を左右する「生命線」に急変し、さらには帝国日本の「命取り」にさえ発展したのであった。それはとりもなおさず、近代日本が甲午（日清）戦争で一度手に入れながら、「三国干渉」によってやむなく手放してしまったこの土地の権益を獲得し死守するために、その後日露戦争、中日戦争、また日米戦争でもある太平洋戦争を次々と起し、そして最終的にはみずから作り出したその傀儡国家である「満州国」とともに倒れざるをえなかったという過程にはかならない。やや誇張した言い方をすれば、日本の近代史は、あたかもここ「満州」を中心に展開されてきたようにさえ感じられないことはない。その一端は、たとえば「残留孤児」や「七三一部隊」などに象徴されるように、戦後五十年経った今日でもこの最大の古傷がなお疼いてやまないことから、いくぶんなりかはずかかえる。

しかし、近代日本の運命を一面において大きく決定してしまったとき言えるこのような「満州」について、なぜかその歴史的な位置付けはいまだにまだ正確に定まっていない。たしかに教科書的な「歴史」において、「満州」、というより一時それを「国土」として有していた「満州国」はすでに一応の「裁断」を受けている。だが、近代以降ほとんど日本人の心象風景の一つになってきたあの「赤い夕日の満州」の描いた心情的、あるいは精神的な軌跡についてはけって歴史的に整理できているとはいいがたい。というのも、戦後数多くの旧植民地関係の書物が書かれてきたが、その中でこと「満州もの」になると、なぜかその特殊なイメージと絡んで一種のノスタルジーがつねに濃厚につきまとって、それはたとえば終戦直後の「引き上げ」の悲惨な体験を伝えるものの中にさえ確認できるほどである。そして「満州」に関するこの特殊な思いがもし単なる一種の郷愁に留まるならば、問題はまた単純かもしれないが、多くの場合かつて「理想国家」を建設しようとしたあのとてつもないユートピア幻想と絡んでいるため、事情をいっそう複雑にしている。言ってみれば、まさに「満州」に係わるこの濃厚なノスタルジーと過激なユートピア幻想が表裏となって、終始「満州」についての本格的な歴史的な位置付けを妨げ、またその評価に大きな振幅をもたらしているのである。

たとえば、一時「満州国」総務庁次長を務めたことのある岸信介は、戦後、このような発言をしている。

明治維新以来、列強争覇の渦中に伍して、自国の独立と東亜平和をモットーとした日本は、日露戦争の結果、東亜の衰運を挽回するとともに、新天地満蒙の開発に当った。(中略) 満鉄を中心とする満蒙開発は、新天地の驚異的な発展をもたらしたが、なお、多くの障害が纏綿した。新興満州国はそれらの矛盾を止揚し、自ら欲するままに開発建設することができた。民族協和、王道楽土の理想が輝き、科学的にも、良心的にも、果敢な実践が行なわれた。それは正しくユニークな近代的国づくりであった。直接これに参加した人々が大きな希望のもとに、至純な情熱を傾注しただけでなく、日滿両国民は強くこれを支持し、インドの聖雄ガンジーも遙かに声援を送った。当時、満州国は東亜のホープであった。

(『あゝ満洲』、満州回顧集刊行会、昭和四十・三)

ここには、かつて「満州国」の実際の支配者の一人で、戦後総理大臣まで登り詰めた政治家だからこそ、こうまで自分を正当化してしまう一面というものがたしかにある。しかし、つとに山室信一氏が『キメラ——満洲国の肖像』(中公新書、一九九三・七)において指摘しているように、岸ほど過激でなくても、こうした発言に近い主張や感情は、当時なんらかの形で「満州」と係わっていたほとんどの日本人に多かれ少なかれ共有されているのも、また事実であろう。そして、それは往々にして「満州」への進出と侵略の歴史に対する批判と反省の合間に半ば無意識的に漏れてくることで、問題をさらに複雑にしている。おそらくこれは単なる左右二つの歴史観の単純な対立ではなく、むしろ反省の中に郷愁を潜ませ、また郷愁の中に反省の涙を注入せずにはいられないという、一種の捻じれた形でしか表せない複雑な心情なのかもしれない。むろんこの心情には個人差によってその反省と郷愁の比例が著しく異なり、またその比例の多寡によってまったく相反する歴史認識が導き出されていることも否定できない。ただ基本構造としてのこの両者の同居と捻じれは、岸のような支配者側の人間はもちろんのこと、たとえ敗戦時の生き地獄を経験したもっとも底辺にいる人々の中にも確認することができる。そしてまさにこうした心情が長い間整理しないまま持ち越されてきたからこそ、戦後五十年経った今でもなお「満州」に関する認識は定まらず、特に公私の場によって大きな食い違いが見られるような事態を生み出している。その意味でこの捻じれた心情、ひいてはその背後に潜んでいるかつての新天地開拓の幻想を一度その発生から破滅まできちんと見極めることなくしては、とても「満州」を語ることはできないし、ましてやその正しい歴史的な位置付けなどはなおさら無理であるに違いない。

思うに、新天地を求め、そこで農業を行いながら、理想社会を作るのは、日本、ひいては東アジア全体の古くからのもっとも普遍的、また通俗的なユートピア思想だと言える。それは近代日本においては、たとえば北海道の農業開発に見られるように、多くの場合、まず狭い意味の「開拓」と直結し、また農業移民を前提とすることで成立している。そのことから考えれば、いわゆる「満州事件」後、鳴り物入りで推奨された「満蒙開拓」は、その規模と影響においてあるいは近代日本の作り出した最大の開拓幻想、またはユートピア幻想と見ることもできなくはない。ただこの場合は、従来の北海道などのケースと違って、その幻想の生成が単に開拓実践という実際の行為によってなされたのではなく、むしろ甲午(日清)戦争以来のさまざまな満州をめぐる言説が参与し、貢献していることが非常に意味深い。まさにこれらの一人よがりの叙情的な言説の氾濫があつた「赤い夕日の満州」像、あるいは「満州幻想」を用意、形成したのであり、また逆に開拓幻想自体が、いわばこうしたさまざまなロマン的言説の集大成にほか

ならなかったのである。

以上のこれらの事情に鑑み、本稿では、いわゆる素朴なユートピア思想と直結しそうな「満蒙開拓」という「開拓」の事実そのものよりも、むしろ明治以来産出されたさまざまな満州関係のテキストを材料に、それらの言説の考察を通じて、かつて近代日本が生み出した最大の幻想——「満州ドリーム」の生成の足跡を辿りたい。それはけっして十分とは言えなくても、少なくとも冒頭で指摘したあの郷愁と反省の捻れた心情に対して、私なりの整理、または解明の糸口を与えることになるだろう。

1. 甲午（日清）戦争、日露戦争と「赤い夕日の満州」

中国東北部に対する日本人の関心は、おおむね甲午（日清）戦争の開戦とともに始まる。東学党の乱で蜂起した農民軍鎮圧を理由に相次いで朝鮮半島に出兵した両国軍の衝突は、中国側の戦闘意志の薄弱さも手伝って陸海とも日本側の有利な形勢の下に進められ、開戦後三ヶ月も経たないうちに戦線はついに鴨緑江を越え、日本軍も東北領内に侵入した。戦場における日本軍のこうした度重なる勝利を日本国内にいち早く伝えたのは、当時のジャーナリズム、たとえば『国民新聞』に掲載された国木田独歩の『愛弟通信』（初出時の題名は『海軍従軍記』）のような従軍記者の従軍記や戦争報道などであるが、中でも開戦にわずかに遅れて創刊された博文館の雑誌『日清戦争実記』は月三回の発行で進展する戦況を写真を交えて詳細に報道し、広く大衆の読者をつかんだ。従軍記者たちのこうした報道が、その内容をほとんど日本軍の戦勝に当てていたの言うまでもないが、そうした戦況報告の合間に現地の状況、特に地理的、民俗的な状況もまた当然のこととして少なからず報道された。そしてこれらの戦地の情報ははからずも後年のいわゆる「満州」に関する言説の最初のものとなったのである。

しかし、戦争の間に行なわれた戦地紹介としてのこうした一連の「満州」報道が、その後ただちに日本人の満州イメージの形成にはつながったわけではない。占領した場所が遼東半島に限られたこと、日本側の勝利にだけ目を奪われ、現地を多角的に捉えなかった報道ぶりもその一因だが、三国干渉によって一旦遼東半島を中国に返還すると、この地に対する関心が急速に薄れ、かわって新領土となった台湾への眼差しがにわかになくなってきたからである。この事実は、たとえば同じ博文館から発行されていた当時最大の総合雑誌『太陽』の戦後の編集動向を見れば、一目瞭然である。すなわち終戦翌年の明治二十九年の『太陽』には満州関係の記述はわずかに泉鏡花の反戦小説とも言える「海城発電」（第一号）、人類学者の鳥居龍蔵の連載「遼東半島」（第六号～第十五号）、宗教学者の岸本能武太の「遼東風俗一斑」（第十三号、十七号）の三編ぐらいしか見当らず、次の明治三十年になるとそれがまったく姿を消してしまう。そしてこれら満州もの取って代って登場したのが、台湾についてのさまざまな紹介と論文である。

ところが、いわゆる台湾の植民地経営だけに目を奪われたのも東の間であった。明治三十年代に入ると、ロシアが東清鉄道の敷設などをはじめ急速に「満州」や朝鮮に進出し、さらに義和団の乱に乗じて瞬く間に「満州」を占領した。こうしたロシア勢力南下の一連の動きに刺激され、たとえば「満州」の軍事、商業上の地理的重要性を強調する「満州論」がふたたび『太陽』（小藤文次郎、明治三十五年第十四号）誌上に現れたように、「満州」が運命的にももう一度日本中の関心の的となる。そしてこのロシアの南侵をなんとかして食い止め、「満州」と朝鮮における権益上の劣勢を挽回しようとしたのが、ほかならぬ明治三十六年から三十七年にわたる日露戦争であるが、ただこの戦は前回の甲午（日清）戦争と違って、世界最強とも言われ

るロシア陸軍を相手にしただけに、勝ち進むにつれ、度重なる苦戦と莫大な人的犠牲を強いられた。そうした前線の捷報と悲報はまさに激戦場の地名とともに大々的に日本に伝えられ、国民の心を強く捉えた。二百三高地攻撃、旅順開城、遼陽会戦、奉天会戦——巷の議論の中心を占めたこれらの言説は多分に異国情緒を含みながら、人々の想像力を刺激し、遠く離れた「満州」を一気に身近なものにしたのである。

たとえば、明治四十二年に発表された田山花袋の長編小説『田舎教師』では、青雲の志を抱きながら、家庭の事情で進学できず、寒村の小学校教師として平凡な生活に埋もれていく文学青年、林清三の姿が描かれているが、その清三が肺病に罹り、病床に伏してからもしきりに気にしているのがまさに遼陽会戦の進展であり、結末では「遼陽が取れた」というニュースに感涙をこぼしながら、「満州のさびしい平野に横わつた同胞」を思いつつ、若き最後を遂げたことになっている。作者の花袋は、かつて日露戦争の際に従軍記者として半年近くも「満州」に滞在し、帰国後『第二軍従軍日記』（博文館、明治三八・一）を発表するほど、現地の状況を詳細に観察し、また記録した人である。その経験あってこそ、花袋は国勢の高揚しつつある中、人一倍出世願望を持ちながらも、結局は零落れていかざるをえない青年の運命を描くにあたって、ほかならぬ日露戦争の進展を作品内の時間の流れとして選び取り、また戦場である「満州」の地名を繰り返し反復することによって、いかにも効果的にこの悲劇のクライマックスを作り上げたのである。

このように、日露戦争は日本の国運をかけた戦争であるだけに、また強国ロシアを相手に想像を絶する犠牲を強いられただけに、否応無しにその戦場である「満州」に全国民の目を釘付けにさせたのである。『日清戦争実記』と同じ趣旨で、明治三十七年二月創刊された『日露戦争実記』（独立評論社編集、育英社発行）の第一号が二十六版、二十五万部という空前の売れ行きを見せたのも、その一端を示すだろう。そしていわゆる「十万の英霊、二十億の国帑」を代償に勝ち取った「満州」は、その後まさにこれらの「犠牲」の記憶とともに人々の心に深く根差し、辺境でありながらもいつの間にか感傷、ひいては郷愁の対象へと変貌していったのであった。その意味で、日露戦後にわかに流行りだした次の「戦友」という歌は、当時のそうした国民の心情をもっともよく表したものと言える。

戦友（真下飛泉作詞 三善和気作曲）

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 一 | ここはお国を何百里
離れて遠き満州の
赤い夕日に照らされて
友は野末の石の下 | 二 | 思えば悲し昨日まで
真先に駆けて突進し
敵を散々懲らしたる
勇士はここに眠れるか（中略） |
| 十二 | 思いもよらず我一人
不思議に命ながらえて
赤い夕日の満州に
友の塚穴掘ろうとは | 十三 | くまなく晴れた月今宵
心しみじみ筆とって
友の最後をこまごまと
親御へ送るこの手紙 |

- 十四 筆の運びはつたないが
行燈のかげで親たちの
読まる心おもいやり
思わずおとす一雫

『学校及家庭用言文一致叙事唱歌三』（明治三八・九、引用は講談社文庫『日本の唱歌』＜金田一春彦・安西愛子編＞による）

太平洋戦争の終結まで「日本陸軍」（大和田建樹作詞、深沢登代吉作曲、明治三七・七）とともにもっとも広く歌われた軍歌と言われるこの歌は、もともと意識的に伝達しようとしてい

る亡き戦友への心情もさることながら、その眠れる場所としての「赤い夕日の満州」の持つ独特の感傷ないし叙情性を国民一般の心に濃厚に植え付けた。そして、まさにこの歌に源を発し、以後「赤い夕日の満州」はあらゆる言説の中で流布しながら心象風景と化し、日本人の「満州」に対するイメージの原型を形成していったのであった。それは、たとえば大正六年九月、中国漫遊のため東北三省を訪れた徳富蘇峰までがこの「満州」の「落日」に感激し、富士の日の出に匹敵する「美観」と絶賛してやまなかったことにもうかがえる（『支那漫遊記』、民友社、大正七・六）。蘇峰らのこうした感激の中には、むろん自然現象としての「満州」の落日の美しさに対する感激も多分に含まれているが、しかしそうした要素以外に日露戦争後多くの日本人が共有してきたイメージも、また当然無意識の内に加味されていると考えられよう。さもなければ、日本人にだけ「赤い夕日の満州」像がはびこることの理由は説明できない。そしてこの感傷ないし叙情的な満州像こそ、その後渡航者の増加に伴い、次々と新たな意味付けを増やしながら、最終的にはあの「満州国」成立後の巨大幻想へと突入していったと言えよう。

2. 「馬賊」と大陸雄飛

日本人の満州イメージの成立を考える時、「赤い夕日」の持つ感傷性以外に、もう一つ忘れてはならない要素が、日露戦争前後、一部の青年の間で急速に広まった大陸雄飛の精神志向とそれを実践する形で中国に渡った大陸浪人の存在である。彼らの活躍はいわば従来の感傷的な満州イメージの上に、また新たなロマンチズムを注入したことで、以後青少年をはじめ、多くの人々の満州夢を掻きたて続けたのであった。この種の精神志向が生まれた背景として、一つは清朝打倒を目的とする中国の革命運動がここに来て、いよいよ本格化し、しかも日本、特に東京を一つの根拠地としていたことと、もう一つはそうした中国革命に対し、日本の民間右翼組織や国家主義者、アジア主義者たちが各々の目的から一様に強い関心を示し、一部には熱い援助の手を差し伸べたり、この機会を日本の大陸進出に利用しようとしたりする言動が急に目立ってきたことが挙げられる。

前者の例としては、たとえば一九〇五年に在来の革命組織、孫文の興中会、黄興の華興会、章炳麟の光復会などが東京で大団結し、孫文を総理とする「中国革命同盟会」を結成している。後者の場合は、宮崎滔天の活躍が何よりも有名だが、従来の黒竜会ほか、その下部組織とも言える有隣会（明治四四年成立）、さらに同じ年に結成された善隣同志会や支那問題研究会などがほぼ同じことを趣旨として掲げている。これらの組織は、時には中国に人員を派遣して革命派と接触したり、時には中国問題で宣言書などを大々的に出したりして、その活動がいわゆる大陸雄飛の夢を煽る上で、多くの青年たちに少なからぬ影響を及ぼしたと言える。のちに、大衆児童文学作家として名を知られる山中峯太郎が中国革命の熱気に感激し、陸大を中退して「天下を取りに行くんだ」と豪語しながら大陸に渡ったのは、まさに日本国内のこのような雰囲気から浮かされた好例である。そしてこの時期、日本の青少年たちのこうした大陸雄飛志向を刺激し、その夢を掻きたてた要素としては、先の右翼組織や革命派などの活躍以外に、もう一つ、言ってみれば本当の意味の大陸浪人——日本人馬賊、ひいては馬賊そのものの存在もおそらく無視できないだろう。すこし後になるが、たとえば大正十一年頃にいわゆる「馬賊の歌」が莫大な人気を得て流行りだす。

馬賊の歌（宮島郁芳詞 鳥取春陽曲）

僕も行くから 君も行け

狭い日本にゃ 住みあいた

浪の彼方にゃ 支那がある
俺に父なく 母もなく
ただ傷しの 恋人や
国を出た時ゃ 玉の膚
これぞ誠の男の子じゃと
長白山の朝風に
北満州の大平野
み国を去って 十余年
亜細亜高根の繁間より
今日吉林の城外に
明日は襲わん奉天府
さっと閃く電光に
くり出す槍の 穂尖より
銀月高く 空晴るる

支那には四億の民が待つ
別れを惜しむ 者もなし
夢に姿を 迎るのみ
今じゃ 槍傷 剣傷
ほほ笑む面に針の髻
剣をかざして 俯し見れば
己が住家にゃ まだ狭い
今じゃ満州の大馬賊
繰り出す手下が五千人
駒の蹄を忍ばせて
長髪風に靡かせて
今日の獲物が五万両
荘竜血を吐く 黒竜江
ゴビの砂漠にゃ草枕

(講談社文庫『日本の唱歌』〈前掲〉より)

一般に「男の歌」とも呼ばれたこの歌は、もともと大陸浪人の歌で、内地に流れ込んでから急速に流行りだしたと言われており、宮崎滔天の作詞とする書物もある。一説によれば、滔天が全国遊説の会場で、公演の後かならずこれを高唱し、聴衆の拍手を浴びたという(添田知道『鱒之齒軌』、素面の会、昭和五六)。これらの事情を背後に控えていることもあってか、いかにも勇ましく感じられる歌である。そしてここで歌われている歌詞の内容は、大言壮語のそしりこそ免れないものの、まんざら作り話でもないところもある。むろんモデルまで存在するとは言えないが、実はこの時期これに近い形の、つまり本当の大陸馬賊に、それもその頭目になった日本人が現に三、四名を下らず実在していたのである。彼らの海のむこうでの活躍ぶりは、大陸浪人などを通じて日本にも伝えられ、一部の青少年たちの「大陸夢」に多大な影響を与えたとと思われる。

日本人馬賊の先駆けは、もっとも早いものは日露戦中にまで遡ることができる。当時、日本陸軍はロシア軍の後方攪乱のために一部の大陸浪人や在来の地方馬賊を掻き集め、彼らを中心にそれぞれ満州義軍と特別行動班を編成して、その任務に当たらせた。前者の満州義軍が予備の陸軍中佐、花大人こと花田仲之助を総指揮官とし、主として「満州」現地で鉄道破壊や正規軍の援護射撃などを行っていたのに対し、後者の特別行動班は、遠く内蒙古に入り、ロシア軍の背後から特にその兵站線や東清鉄道などを狙っていた。これらの特別任務で活躍し、のちにその名を広く知られた者として、たとえば東清鉄道の嫩江鉄橋を爆破しようとしてロシア軍に捕まえられ、明治三十七年四月ハルピンで銃殺刑に処せられたいわゆる六烈士の二人、大陸浪人の横川省三と沖禎介や、遼陽会戦前後、単身で地方の馬賊隊を率い、随所クロパトキン部隊を脅かした辺見勇彦などが挙げられよう。

また、馬賊ではないが、軍の密令を帯びて、ロシア軍の情報収集の目的で、内蒙古カラチン王室の教育顧問として派遣され、現地できざまな諜報活動に従事した河原操子も、結局はこれらの謀略馬賊の周辺にいた一人である。彼女はもともと漢学者の父親の影響で長野師範女子部在学時代から大陸雄飛を志し、卒業後下田歌子の推薦で、まずは横浜の大同学校(華僑の子弟を教育する機関)、後には中国人経営の最初の女学校——上海務本女学堂でも一時教鞭を取った人で、日露戦後、こうした戦時中の活躍が評価されて、戦功で女子初めての勲六等に叙せ

られ、晴れやかに一宮鈴太郎、横浜正金銀行副頭取夫人となっている。

また一方、以上の軍関係の謀略馬賊とは違って、まったくの自力で地元馬賊の頭目に申し上がった女性もいる。通称「シベリアお菊」、あるいは「満州お菊」とも呼ばれた山本菊子という人物である。一説によれば、彼女は九州、天草の生まれで、七才の時朝鮮に売り飛ばされ、以後大陸各地を放浪したが、その間官僚の妾や、料理屋の女中、さらに日本軍の慰安婦にまでなったことがあるという（渡辺龍策『馬賊』、中公新書、一九六四・四）。ブラゴエンチェンスクの「オーロン宮」という酒場で女中をしていた時、経営者であり、馬賊団の大頭目でもある孫花亭（張作霖の義兄弟）という人物を一度日本警備隊から命を助けてやったことが切っ掛けとなって、その後いつの間にか大馬賊団の頭目に推挙され、その名が全満州に響き渡り、馬賊の仲間の間でも多大な影響力を振るった。

このように、明治後半の大陸浪人を中心とするこれらの日本人馬賊の活躍は、まさに「十余年」後のあの「馬賊の歌」の流行に格好の土壌と素材を提供したと言える。また彼らの存在は、日露戦勝に浮かされながらも、つねに国内の閉塞状況に不満を持ち、いつかは日本脱出を試みようとしていた一部の青年たちには、紛れもない一つの颯爽としたお手本を示したと思われる。というのも、大正時代に入ってからこうした馬賊に憧れ、大陸に渡った若者が後を断つことなく、それがあたかも一つの系譜を成すかのように、第二次世界大戦の終結まで続いたからである。詳しい叙述は省略するが、たとえば、川島浪速らの第二次満蒙独立運動の際、その決死団長を引き受けたのを皮切りに、運動失敗後も度々渡中し、一時張作霖の軍事顧問も勤め、「満州国」成立後は、満州国軍安東地区部隊の隊付中將にまで申し上がった有名な御用馬賊張宗援こと伊達順之助や、単身で満蒙踏破中、馬賊に捕られたのが切っ掛けで、そのまま馬賊に仲間入りし、第二次奉直戦争の時、頭目として張宗昌麾下で活躍し、のち東北抗日義勇軍の総頭目にまで祭り上げられた尚旭東こと小日向白朗、また海賊船で満州に渡り、一時伊達の訓練を受けた後、地元の馬賊団に身を投じ、満州事変後の溥儀天津脱出の際に華北地方で中国官憲の牽制工作を巧みに行った謀略馬賊の松本要之助など、その数は実に枚挙にいとまがない。むしろこれらの馬賊の多くは、そのまま日本軍の手先であり、彼らの犯した罪の数々はけっして許されるべきではないが、ただその存在自身がつねに伝説化された形で、一部の青少年にロマンチックな夢を掻き立て続けたのも事実であろう。「夕日と拳銃」という満州イメージの中で、片方の拳銃、つまり馬賊を抜きにしてはとて「満州」のことが語れないのは、まさにこの一点においてである。

3. 新天地と逃避行の間——漱石の「満韓ところどころ」

明治三十八年九月、日露両国はアメリカの斡旋でポーツマス講和条約を結び、一年六ヶ月にわたった「満州」での利権争いの戦争を終結させた。この条約によって日本は甲午（日清）戦争後の三国干渉で手放さざるをえなかった南満州の権益の一部を、まさに十年間の「臥薪嘗胆」の後、多大な犠牲を払いながらももう一度手に入れることができた。それは具体的には、ロシアが持っていた関東州租借権と長春・旅順口間の鉄道及びその付随利権という、実際には鉄道を中心とした諸施設に限られていたのであるが、しかし戦勝気分に乗った日本の朝野は、そんなことにはまったく頓着なく、あたかも南満州を新たな植民地として獲得したかのような雰囲気のみながっていたという（伊藤武雄『満鉄に生きて』、勁草書房、一九六四・九）。現にその後のいわゆる「満州経営」の方策を見ても、まさに「陽に鉄道経営の仮面を装い、陰に百般の

施設を実行する」(後藤新平「満州経営梗概」、原田勝正『満鉄』〈岩波新書、一九八一・十二〉による)という、どこまでも満鉄を「満州版東印度会社」として、さらに「満州」を新“領土”として「経営」していく姿勢を取っているのである。

その意味で明治三十九年十一月満鉄設立後、その沿線地域に対する意識的な支配権拡張の政策の下で多くの人が職を求めて「満州」に渡り、中には新天地で「濡れ手に粟」の利益をつかもうとする「一旗組」(原田勝正『満鉄』)まで現れたのも、あるいはきわめて当然のことかもしれない。事実この時期、「満州へ行けばどうにかなる」という幻想は、戦争直後のあの感傷的な満州イメージと交錯しつつ、ほかならぬこの新設の国策会社を中心に急速に広がったと言われている。これは逆の視点から見れば、すなわち「満州」が、日本本土で物質的あるいは精神的に追い詰められた人々の格好の逃避郷として、また「満州浪人」が、内地人にはない冒険と悲哀の交じり合ったロマンチズムの持ち主として、まさにこの時点から着実に観念化、さらには言説化され始めたということでもある。そしてその言説化の文学における結実は、意外にも文豪夏目漱石の一連の大陸浪人像が嚆矢となっている。

漱石が大学予備門時代の旧友、満鉄二代目総裁中村是公の招きで「満州」に来遊したのは明治四十二年九月、満鉄誕生から満三年を数えようとしていた時期である。開業以来の基盤整備がほぼ完了し、これから在来の経営方針に向けて大いに邁進しようとするこの時期に中村が漱石をわざわざ「満州」に招待した目的はきわめて明白で、文豪漱石の筆を借りて成長しつつある満鉄の諸事業を内外に宣伝してもらおうという算段にほかならない。現に漱石もその意を十分汲み取ったと見えて、「満州」到着後は持病の胃痛に悩まされながらも、満鉄側の組んでくれた視察スケジュールを実に精力的にこなし、大連・ハルビン間の主な満鉄付属施設をほぼ一通り訪ね歩いている。そして帰国後、彼はさっそく十月二十一日を初日に、以後十二月三十日まで断続的にこの一ヶ月半に及ぶ旅行の報告を『満韓ところどころ』と題して東京・大阪両『朝日新聞』紙上に連載し始めたのである。

漱石研究史の上では、従来、この『満韓ところどころ』についての評価は総じて低い。「クーリー」を始めとする中国民衆に対する差別意識への批判もさることながら、紀行文としても、たとえば「満州で会った自分の旧友の噂で持ち切った」もので、「余りに漱石が出過ぎた」(岩波版『漱石全集』第八巻解説)と、直弟子の小宮豊隆にまで文句を付けられ、そのどこまでも日本人世界の内側に立脚して満鉄以外の現地への関心をまったく示さない「漱石ところどころ」ぶりはつねに攻撃の対象になっている。また「二年に亘るのも変だから」と言って連載を途中で止めた真の理由についても、伊藤博文暗殺事件と絡めて、その「満韓」をめぐる時勢に対する追及意欲の欠如がしばしば漱石の「限界」(友田悦生「夏目漱石と中国・朝鮮」〈芦谷信和等編『作家のアジア体験』所収)、世界思想社、一九九二・七)として指摘される。

しかし、中韓両国の民衆に対する差別意識はともかくとして、以上で非難されている漱石のこれらの姿勢については、もしきわめて好意的な解釈をするならば、おおむね気配り屋漱石一流の韜晦であると理解できなくもない。自分をはるばる「満州」へ招待した中村の真意を十分認識していた彼は、満鉄総裁であるこの旧友に対する義理と、自分の文業を単なるプロパガンダに落とすたくはないという文学者の良心とのほざまに立って、現地の情勢を必要以上に語ることを避け、できるだけ「旧友の噂」でこの紀行文を「持ち切った」ことが、やむをえない選択として想像できよう。また撫順炭坑紹介中の突然の連載中止にしても、年越しが変だという表向きの理由の背後に、およそ満鉄の主な事業を一通り紹介し終えたところで旧友への義理も果たされ、いつこの紀行文を打ち切ってもいいという安堵がどこかで働いたとも考えられない

ことはない。

その意味で、「満韓」をまったく無視したこの『満韓ところどころ』に、われわれはさまざまな配慮に囚われ過ぎた漱石のアジア認識の甘さを指摘することができて、それはただちに漱石にとって「満韓」が「軽微な意味」しか持たなかったという結論にはおそらく結び付かないし、ましてやその旅行が彼の「精神に及ぼした影響がほとんど皆無」（友田悦生、前掲論文）だという批判になると、なおさら再検討の余地が感じられてならない。というのも、紀行文『満韓ところどころ』でこそはっきり露呈しなかったものの、この「満韓」旅行を切っ掛けに漱石文学における人物像は明らかにある変化を見せ始め、これまでの作品にはけっして現れることのなかった、言ってみれば外地志向型の人物が一つのタイプとして新たに創出され始めるからである。彼らは、あるいは恋愛競争の失敗者、あるいは近代システムからの逸脱者として造形され、その存在は、同じ「遊民」の性質を持ちながらも、従来のいわゆる「高等遊民」、たとえば『三四郎』（明治四一・九）の広田先生や『それから』（明治四二・六）の長井代助などと異なり、むしろ根本的なところでそうした「高等遊民」を含む主人公たちの世界を相対化するものとして機能している。

たとえば、「満韓」旅行後初めて書かれた小説『門』（明治四三・三）の中で安井という人物が登場するが、彼はもともと大学時代に同棲中の恋人を親友である主人公の宗助に奪われ、失意のもとに「満州」に渡った存在として設定されている。その彼が、同じ満州浪人の「冒険者」で、現在、蒙古で牧畜業を営んでいるという、宗助の借家の家主坂井の弟と一緒に徐々に東京に現れ、ただでさえ昔の「徳義上の罪」に囚われ続けている宗助をいっそう苦しめることになる。作品において帰京した安井については具体的に何も書かれていないが、しかし小説の後半は紛れもなく彼との再会を恐れる宗助の苦悶とそこからの自己救済を中心として展開されている。その意味で安井の名は「色んな人が落ち合つてる」「物騒な所」としての「満州」とともに明らかに一種の記号性を持って、主人公宗助と彼を取り巻く平凡な日常空間を揺がし続ける、作品のもう一つの極をなしていると思われる。

また、『門』の次に発表された長編『彼岸過迄』（明治四五・一）では森本という不思議な男が描かれているが、過去に「様々な冒険譚の主人公であつた」彼は、「非凡の経験に富んだ平凡人」として、この小説の形式上の主人公、「平凡を忌む浪漫趣味の青年」田川敬太郎の「多大の興味」をそそり、その「探検」趣味に少なからぬ刺激を与えながら、ある日突然新橋停車場の職を投げ捨てて大連へ渡ってしまう。その後、田川敬太郎は彼の残した蛇の彫刻の洋杖を「指標」に「社会の潜水夫」のような「探偵」行動を開始するのであるが、彼が突き止めたのは友人須永市蔵とその従兄妹田口千代子との複雑な恋愛感情をめぐって形成される男女の「小さな宇宙」にはかならない。作品の中核でもあるこの「小さな宇宙」の周辺には、むしろ二人の叔父でもある自称「高等遊民」の松本恒三のような、双方の相談を受けつつその「小さな宇宙」を分析、批評する人物も配置されるが、しかし松本も含め、登場人物たちの自閉的な関係構造を突き破り、まったく外側からそのすべてを相対化する「一種の符徴」のような役割を果たしているのは、紛れもない満鉄「大連電気公園娯楽掛り」の森本の存在である。彼は、作品の後半において登場こそしないが、しかし須永市蔵の到達した「考へずに観る」という最後の心境を考慮すれば、彼の果たした役割はけっして軽んじられない意味を持っている。

登場人物を「満韓」に脱出させることで、作品主人公の世界に対してある「批判」的な意味を加え、あるいは一種の相対化を計ろうとする『門』や『彼岸過迄』のこの構造は、作者晩年に書かれた未完の小説『明暗』（大正五・五）にも見出せる。「我執」に囚われた人間たちの愛

憎を基本モチーフとするこの作品では、主人公の津田由雄はその「自分丈の事しか考へられない」生き方のために、妹のお秀を始めとする周囲からつねに批判を受けるが、しかし「丸で自分が見えない」彼には、同じ「我執」に憑かれた妹たちの「理屈」は、一向通用しない。唯一彼を心から「厭がらせ」、その「余裕」を根底から揺がす存在は、自称「生涯漂浪して歩く運命を有つて生れて来た」「無籍もの」で、「善良なる細民の同情者」である小林という人物にほかならないが、津田の叔父である藤井のところまで長い間雑誌の編集を手伝ってきたこの男は、生活苦のために「とうとう東京に居たたまれなく」なり、近々「朝鮮へ落ちる」ことになっている。作中、この朝鮮への「都落」は、いわば人生最後の砦として、「上流社会」に対する小林の「自棄的闘志」を支える一種の「武器」のような機能を付与されており、まさにこの究極的な立場に「落ちた」からこそ、彼はまったく「自由な境遇に立つて」津田に「復讐」もでき、また徹底的に外側から作品世界全体を相対化することもできるのである。

このように、従来の「高等遊民」に比べ、こうした一連の「下等遊民」としか呼びようのない人物群が、「満韓」旅行後、漱石の作品に一挙に登場し始めるのはけっして偶然ではない。一ヶ月半にわたる旅行の中で、彼が出会ったのは旅順警視総長の佐藤友熊や大連税関長の立花政樹のような「上流社会」の旧友ばかりではなかった。五高時代の教え子で、漱石家の書生にもなったことのある俣野義郎のような一般の平社員はもちろんのこと、日本人の吹き溜り場のような「満韓」の性格を考えれば、さまざまなエキセントリックな経歴の持ち主にもきつと何かの形で接していたに違いない。そうした人々の激しい生き様に対する観察が、作家である彼の精神面にまったく影響しないわけがなく、特に「我執」を中心として動いている彼の東京での交友空間を考えれば、両者の比較とそこに見られる違いは大いに彼の内面を動揺せしめたことは想像に難くない。『門』の安井に始まる一連の外地志向型の人物造形は、いわばこの衝撃の直接的な産物で、そこにはこれまでのややもすれば自閉的になりがちな世界から離れて、いよいよ「外部」または「社会」的な要素をも視野に入れ、みずからの「我執」を相対化しようとする漱石の精神運動の軌跡さえ確認できる。その意味で「満韓」旅行は漱石の「精神に及ぼした影響がほとんど皆無」であるどころか、むしろ決定的な“事件”と見なされるべきであろう。

4. 日本近代ツーリズムの成立と「満韓」修学旅行

漱石は、その「満韓」旅行の後半、「満州」から朝鮮へ移動する際に、国境である鴨緑江を蒸気船で渡っている。その時、彼が目にしたかどうかかわからないが、この頃、この国境河にはすでに鉄橋の架設工事が始まっていた。鉄橋はそれから二年後の明治四四年十一月に竣工し、そこではじめて従来のいわゆる朝鮮半島縦断鉄道が一直線に満鉄と連結することになった。鴨緑江鉄橋の完成は、一時流行り小唄まで生まれたほど社会のさまざまな分野に多大な影響をもたらしたが、中でもこの橋を通して日本から朝鮮、「満州」を経てヨーロッパに至る国際連絡運輸が実現されたことで、日本の近代ツーリズムの成立と発展に大きく寄与したことは特に注目されるべきだろう。ちなみにちょうどこの朝鮮、「満州」経由の国際連絡運輸が可能となった五ヶ月後の明治四五年三月に、鉄道院を中心とする日本郵船、東洋汽船、南満州鉄道などの共同出資でジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）が設立され、そしてこのビューローから一年後にすでに第六回国際連絡運輸会議（ロンドン、一九一一年・七）で設置決定済みの満鉄経由世界一周周遊券、東半球周遊券「新橋から倫敦ゆき」の切符が発売されたのである。

設立当初のJTBの事業内容からもうかがえるように、日本の近代ツーリズムは、十九世紀後半からヨーロッパでブームが続いていた世界一周旅行の余波を受けて、草創期からしばらくの間は主にそういう形で来日した外国人観光客をターゲットにしていた。そして彼らのニーズに答えるためであろうか、初めから海外、特に「満韓」との連絡が重要な事業の一つとして取り込まれた。JTB設立後一年も経たないうちに大連、朝鮮、そして台北支部が次々と設置されたのは、つまりはそうした事情の端的な現れと言える。創立期のこのような方針は、その後大正半ばに入って日本人観光客が増大し、さらに大正十三年、日本の旅行文化向上を事業目的とする文化運動団体——日本旅行文化協会（のち日本旅行協会と改称）が設立されてからも、おおむねそのまま継承された。

たとえば、日本旅行文化協会の設立とともに創刊されたその機関誌とも言える旅行専門雑誌『旅』の創刊号（大正十三・四）において、当協会設立の趣旨を説明するに際し、「内地」と並んで「朝鮮、満蒙、支那等に於ける人情、風習の紹介」もその活動目的の一つとして指定されており、また同じ創刊号に掲載されている満鉄の広告には「旅行シーズン来る/朝鮮へ！/満州へ！/支那へ！」というすこぶる直截的な宣伝文句が大きく刷り込まれている。これらのことはおよそ一様に「満韓」が日本近代ツーリズムの成立過程で終始「内地」に劣らぬ形で取り込まれていた事実を示していると言えよう。ちなみに時代はやや下がるが、昭和五年に新進女流作家の林芙美子はまさに満鉄の配慮で、当時許可なしではまだ行くことが難しかったハルビンまで個人旅行しているし、さらに翌六年には今度はビューローの世話にもなりながら、事変混乱の真っ最中の「満州」を通して、シベリア鉄道でヨーロッパに向かっていく。

しかし、この林芙美子のような個人旅行者の斡旋は、あくまで「満州」における日本近代ツーリズムの事業内容の一部に過ぎなかった。これと同等、いや場合によってはこれを上回る比重で中高生の団体旅行、つまり修学旅行も盛んに手掛けられた。日本の中高生の「満韓」への修学旅行は、どうやら明治二十九年の兵庫県立豊岡中学校の朝鮮旅行を嚆矢としているようだが、本格的に行われ始めたのはおよそその十年後の明治三十九年頃と見られる。この年に、まず文部省と陸軍省の共同主催で全国から選ばれた一部の中学生が五つの班に分かれ、日露戦争の戦跡をめぐる「中学校合同満州旅行」が実施され、以後これに右へ倣えの形でいわゆる「戦場旅行」が急速に全国に広まっている（久保尚之『満州の誕生』、丸善ライブラリー、平成八・二）。

このような事態が生じた背景には、むろん戦場の雰囲気はまだ生々しく残っている戦跡を愛国心向上の格好の材料として意義ある修学旅行の見学地にすべきだという有識者の議論（有賀長雄「旅順と修学旅行」〈『学生必携修学旅行案内』、明治三八〉、白幡洋三郎『旅行ノススメ』〈中公新書、一九九六・六〉による）や文部省、陸軍省などの誘導もあろう。しかし、先程も確認したように、開戦以来の夥しい戦地報道によって培われた「満州」に対する国民側、この場合は学生側の特別な感情移入も無視できない。いわば、まさにあの多大な感動と興奮を与えてくれた「旅順」に行きたい、二三百高地を一目見たいという全国的な戦勝気分と衝動が彼らを積極的に満州へ足を運ばせ、またそういう修学旅行への「夢」を膨らませたに違いない。さもなければとてもこの昭和初年をピークとし、以後太平洋戦争の開戦直前まで続いた「満韓修学旅行」ブームを説明できないだろう。「組織者」の意図を支えた「参加者」の熱意、これこそが「満韓修学旅行」に象徴される「満州」に対する日本全体の関わり方であり、またその縮図そのものとなっている。

「満韓」への修学旅行は地理的に近いということもあって、最初は主に九州や山口県の学校を中心に行われたようである。たとえば福岡県立修猷館中学校が明治三十九年に「満韓旅行」

を実施しているし、その翌年には山口高等商業学校が後に続いた（久保尚之『満州の誕生』）。大正に入ってからはこのブームが全国的な広がりを見せ始めるが、従来の中学校や商業学校に留まらず、多くの師範学校、また高等学校までも巻き込んでいる。かつて満鉄の調査機関でさまざまな要職を歴任した伊藤武雄の回想によれば、彼が初めて中国と触れ合ったのは、一高在学中の時に、大正六年の夏休みに一高旅行部が組織した「満鮮支旅行団」の一行に加わった彼は山東省を始め、華北、「満州」、さらに朝鮮を四十五日間もかけて大旅行した。そして他の要素もないわけではないが、結局この時の旅は彼のその後の人生を「満州」としっかり結び付けてしまったという（伊藤武雄『満鉄に生きて』）。

このようにどんどん膨らんでいく「満韓修学旅行」ブームは、昭和初年にピークを迎えるとされているが、実はこの前後になるとあたかもこのような「修学旅行」に釣られた形で一般社会人も「満韓」への団体旅行に動き出す。たとえばJTBよりも早く創業され、当時民間業者としては最大の規模を誇っていた「日本旅行会」は、昭和二年に初めての「鮮満巡遊」の団体旅行を主催し、以後おおむね年に一回のペースで戦時中までこれを実施している（『日旅六十年史』、株式会社日本旅行、昭和四五・十二）。日旅のこれらの「鮮満巡遊」のスケジュール表を見るかぎり、視察団と称されるその団員の迎えるコースは中高生のそれとほぼ同じで、戦跡と満鉄関連施設の「巡遊」を中心とする彼らの旅行内容はほとんど大人の「修学旅行」と評しても過言ではない。

また、伊藤武雄の例でもわかるように、日本人の「満州」に対する特別な情念の生成を考える時、中高生を始めとするこれらのパタン化された「修学旅行」の体験自体が、すでに一種満州言説の創造に寄与していると言えるが、さらにこれに輪をかけてその言説創造に貢献しているのが、先の馬賊の場合と同様、おそらくその「お土産話し」の意味合いも持つ帰国後の報告書であろう。文部省と陸軍省の共同主催による明治三十九年の「中学校合同満州旅行」にも『遼東修学旅行記』（明治四十年刊）なる報告書が存在しているようだが、筆者の手元にあるのは、東京府立第一商業学校校友会から出された当校（現在の一橋大学）の「昭和六年度第七回鮮満支視察旅行」の帰国報告書『大陸を歩みて』（富文館、昭和六・十二）という本である。

「東京市有馬尋常小学校」蔵印付きのこの本は、全部で三編からなり、その三編にそれぞれ「紀行」「研究」「余録」を当てている。「紀行」は当番の記録係りによる全日程の毎日の見学内容と感想、「研究」は参加団員八十人の書いた「各々一編」の小論文で、また「余録」は各地で聞いた商業界著名人の講演の記録と第一回目（大正十四年）から第六回目までの「鮮満支視察団」の日程になっている。校長と視察団長の序文によれば、ここにいわば「将来の東亜に卓立すべき青年諸君」「八十の眼に映じた支那」があり、その「一粲を得ば他山の石に止まらざるべき」と高く讃えられている。試みにそのいくつかを瞥見してみよう。

五月三十一日（日曜日）晴 寒さを防ぐ為の二重窓を開くと、淡い朝霧と共に、陽が入って来た。朝だ！満州の朝だ！何となく嬉しい。朗かな天地！午前八時三十分三十台の馬車で出発。折から競馬の広告楽隊自動車が奇妙なメロデーを奏しながら向うに去った。旅館の裏は教会で、あの先の尖った塔の中から荘重な朝の音楽が聞えてゐた。満州医科大学を後回しにして忠霊塔に向ふ。何を措いても先づ、勇士の霊に参拝したいと云ふ心持からであつた。（中略）案内者、高橋氏の説明。「奉天会戦は実に今日満州文化の基、日本勢力の植付にして、その快勝は拳国一致の熱誠に由る。されど果して今日当時意気ありや。三月十日の祭典当日、必らず暴風雨雪等、天候の狂ふあるは、彼の英霊現状に憤慨するに非ずや宜しく発奮興起して、英霊に報いざるべからず」と。氏の熱烈な言々句々、次第に頭

の下るのを覚えた。やおら首を上げて仰げば五月の空に塔の高く聳えて、しみじみ日本帝国民の覚悟を感じたのであつた。(紀行編「第十日」 山田正二)

旅順！それは僕等が常に想像し、追懐してゐた地である。汽車が旅順に近づくにつれ、窓外には当時の激戦を偲ばせる記念碑が、あちらこちらと見えた。旅順は実に静かな駅で、それこそ嵐の後の静けさそのものであつた。ちやうど白いアカシヤの花が一面に咲きそろうつて朝風に高い香を放つてゐた。駅に憲兵が一人、馬に乗つて見張りをしてゐるのは、いかにも要塞地らしい。真白な白玉山の表忠塔が朝日に照らされて、まるで統帥者のようである。記念館、東鶏冠山北保塁の激戦地等、皆断腸の思ひであつた。説明者の一言一句よく当時の苦戦をしのばしめ泣かぬ者はない。(中略)私は思ふ。旅順は日本人の永久の修養地である。中世紀の西欧の人が、ローマへ旅したやうに、いや、西国三十三番、四国八十八箇所を巡つた人々のやうに、ここに敬虔な人々の巡礼せられたいものである。

(研究編「旅順」 安田彦三郎)

暮れてゆく河面、対岸にうつる灯影の美しさ、国境鴨緑江の黄昏は先づ忘れられぬ印象の一つ、何となく心の引き締るのを覚えたのだつた。満州と朝鮮、その境の大河一つで、凡てが非常に異つた風俗習慣を持つ事に、今更乍ら民族といふ伝統の力が感じられた。支那人の粗食と、其体力の強さは特に目立つた。彼等は賃金の前には実に勤勉なるものだ、採木公司での話に或夜業の必要があつた時、喜んで応じた彼等は、三日三晩ブツ通して労働を続けて、且尚平然として続勤を望んだと云ふ。そして一ヶ月貳円で楽々と暮らす彼等である。生活程度、体力の差違、到底内地人は敵し得ぬ。内地人の生活は植民地気分といふが、多くは借財に苦しみつつ、且尚虚栄に捉はれた暮をしてゐる。路上に遊ぶ子供等の服装の華美、駅員が人力車で通勤するといふ風で、生活費の嵩む事が、邦人発展の支障たる一大原因ではないかとしみじみ思はれた。(中略)宝庫満蒙の地は広い。然し漸次狭められてゆく我が權益と同胞の地位を思つた時、我々はそこに責任感が湧然として沸き上るのを禁じ得ない。

(研究編「満州雑感」 川端嘉一郎)

実に「素朴」な観察と感想である。しかしまさにこの素朴な記録の中にこれまでわれわれが確認してきたあの叙情と感傷、さらに權益の対象としての「満州」が“みごとに”凝縮されており、またその言説は十八才前後の少年のものだからこそ、いっそう彼らの囲まれた時代の「真実」とその影響の大きさが思い知らされる。そしてこのような一冊が都内のある尋常小学校の一室に所蔵されていたことをあわせて考えれば、少年たちの「素朴」な「満州」体験とその記録としての言説が時代の流れの中にかに組み込まれ、またいかなる役割を果たしたかは、およそ想像がつくだろう。ちなみに、この本が出版されて六年後の昭和十三年に、十六才から十九才までの青少年を対象に「満蒙開拓青少年義勇軍」が募集され、翌十四年には、まさに胸に大きな「夢」を膨らませながら、多くの少年が「満州」に渡っていったのであつた。

おわりに

一九三一年九月十八日、瀋陽(奉天)郊外の柳条溝で、関東軍による自作自演の満鉄線路爆破事件が起こり、世に言う「満州事変」が勃発した。そして翌三十二年の三月に、これまた関東軍の演出で“新国家”宣言がなされ、いわゆる「満州国」が誕生する。「頂天立地」の「新天地」(「満州国国歌」と讃えられたこの“新国家”の建国理念は、すなわちのちに「満州」の至るところで流通するあの「王道楽土・五族協和」というスローガンに代表されている。そ

の成立の背後に、たとえば「満州青年連盟」（昭和三年発足）や「大雄峰会」（昭和五年発足）のような政治結社、また関東軍参謀石原莞爾や大連在住の評論家橋僕のような個人「思想家」らのさまざまな政治的理念や「理想」が混在し、錯綜しているが、紙数の関係で、それらの動きについてはこれ以上は触れない。ただ一つだけ指摘しておきたいのは、もともと建て前と「方便」（元満州国総務庁警務総局長星野敏雄、「AERA」記者のインタビューに対する回答〈一九九五・三・二七〉）の域を出ないこれらの理念は、たとえ当初はまだほんのわずかな「真実」らしきものを帯びていたとしても、のちの軍部と日本政府の具体的な「満州」運営の中で逐次空洞化され、まったく不毛に終わったという事実である。

そして、こういう事態が生じたのも、もし先程の引用で確認した、あの商業学校の少年たちが感じた「我が權益」に対する「責任感」という角度から見れば、あるいは至極“当然”の結果だったかもしれない。というのは、「満州」において「我が權益と同胞の地位」が強調される以上、いや「満州国」の成立自体がその両者を前提としている以上、たとえどのように立派な「王道」と「協和」の理念が提示されても、それは「方便」でないとしたら、すなわち「幻想」であり、実現不可能な「空想」である。しかし甲午（日清）戦争以来「満州」を完全に「情念」化してしまった国民は、そうした矛盾に気付くはずもなく、むしろ「満州国」という「実体」を得たことによって、従来の「夢」をいっそう膨らませ、ひたすら他の民族とは何ら関係のない、あるいはそれらの民族の犠牲の上に立った「楽土」の実現を夢見続けたのであった。

我が昭和七年三月一日、新国家満州国は満蒙の地に出現し、漢、満、蒙、日、朝を表象する五色旗が、新京の空高く翻つた。満蒙の地は日清、日露の両役を通じ、歴史的にも地理的にも、亦経済的にも我国とは、密接な生命線として結ばれて居るが、新国家の出現は、文字通り彼地の一草一木も、一層直接的な我国の関心事となつた。（中略）今や時は非常時である。熟慮の時期は既に過ぎ去つて、断行の時に入つて居る。老も若きも、男も女も深重なる用意と、決然たる勇氣とを以て、満蒙に向ひ驀進することに依り、我生命線は確保せられ、東亜永遠の平和は樹立される。列国の鼻息を窺ひ、彼等の一顰一笑によつて、我が喜憂とする如き萎縮政策は、今は過去のものとして葬り去られた。新国家の出現は、一般国民にとつて祝福的であるから、列国が之を認めやうが認めまいが、そんなことは問題ではない。時代の要求は日満両国民の協共努力によつて、満蒙の新天地を開拓する点にかかつて居る。

『新満蒙読本』（山口梧郎、荘人社）の序文からの引用である。「満州国」建国からちょうど一年経った昭和八年三月に刊行されたこの本は、序文の訴えとおおり、内容が一種の「満州移住」の案内書になっている。ここには「承認後の満州国」の政治的情勢をはじめ、その「企業と金融」の状況、渡航後の「生活に関する予備知識」、さらに「商人の立場から見る満州」、現地の「サラリーマンの職業」など、「満州」に関する情報が実に詳細に渡って紹介されている。このような案内書が政府関係者ではなく、一個の無名の民間人によって書かれたことに、あるいはより大きな意味があるのかもしれない。なぜならば、まさにこのような一つのパターン化された「言説」でしか「満州」を観察し、また叙述しえなくなった「夢」の「参加者」が無数に存在したからこそ、のちの何十万の「開拓移民」に象徴されるような、「組織者」側の作り出したあの巨大な「開拓幻想」は容易に推進されることとなり、また挫折した後にもなお「郷愁」として生き続けることができたのだろう。

その意味で、この『新満蒙読本』のような案内書を読んで「満州」に渡った人間が当時どれぐらいいたかは、統計の取りようもないが、一つだけ言えるのは、少なくともこの時点から日

本の官民がそれこそ“一丸”となって、お互いに支え支えられながらさらなるとてつもない「幻想」を創出し始めたことであり、またそれが崩壊するまでほとんど無限際に「自己膨張」を続けたということである。むろん「満州国」成立後に、この日本人の「満州幻想」の辿った足跡にも、興味をそそる複雑な経緯が存在するのだが、それらについてはまた稿を改めて論じることにはしたい。